

令和 3年 9月

## 細田 讓 学位論文審査要旨

主 査 萩 野 浩  
副主査 黒 崎 雅 道  
同 本 倉 徹

### 主論文

Comparison of prognostic indices in Japanese patients with diffuse large B-cell lymphoma in the Yonago area

(米子地区におけるびまん性大細胞型B細胞リンパ腫における予後指標の比較)

(著者：細田讓、日野理彦、本倉徹)

平成30年 Yonago Acta Medica 61巻 58～65頁

### 参考論文

1. Efficacy of bendamustine on thrombocytopenia and hemolytic anemia secondary to CD5-positive B-cell lymphoma with massive splenomegaly in a patient with rheumatoid arthritis

(関節リウマチ患者に生じた血小板減少、溶血性貧血、巨脾を伴うCD5陽性B細胞リンパ腫に対するベンダムスチンの有効性)

(著者：細田讓、萩野浩、日野理彦、本倉徹)

平成29年 Molecular and Clinical Oncology 7巻 855～858頁

## 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は鳥取大学医学部附属病院で治療を受けたびまん性大細胞型B細胞リンパ腫（DLBCL）の患者の臨床データを用いて5つの予後指標について比較、検討を行ったものである。その結果、有意差はつかなかったもののinternational prognostic index (IPI)から年齢と節外病変数を除外した、より単純なage-adjusted IPIが最も有用であった。本論文は高齢者を対象に治療している米子地区の実臨床において、age-adjusted IPIが予後予測に有用である事を明らかにし、高齢者に対して積極的に治療した場合には年齢が必ずしも予後予測因子とならないことを示し、明らかに学術水準を高めたものと認める。